

三焦新解（その1）

鍵詞新解で「衛氣と營氣」を取り上げたところ、「三焦」と深く結びついていること(先人には周知のこと)が判明した。しかし「三焦」についていろいろ調べてみると、これが古今東西、謎の謎として2000年の間、斯界をにぎわしている。が、先人の三焦論を読んでも珍文漢文で、じっくり時間をかけて読まない限り、結局のところ何もわからないだろうと感じいった次第。そこで「三焦新解」と題して整理してみようと思う。

「五藏六府」といえば、お酒をキュッと呑んで「いやあ、五藏六府に滲みるねえ」と唸るように、この4字は日本語として定着していることばと考えてよい(死語かも知れないが)。だが、五藏とは何か、六府とは何かとなれば一般の人では辞書でも引かない限り答えられないだろう。いわゆるの東洋医学に在るものは、五藏とは肺・心・脾・肝・腎、六府とは胃・大腸・小腸・胆・膀胱・三焦、これくらいは即答できよう。しかし、いかに東洋医学に通曉していようとも「三焦」がいったい何者であるか説明できないのではないだろうか。

三焦論を展開している先人の論で、実際手元にあるものだけでも両手に余り、そのすべてを読むこと、またその他の三焦論を見つけ出すこともとてもかなわない。このように『内経』の時代から科学が発達したといわれる現在まで、「三焦」これが判らないのである。そこで「三焦とはなんだろう」と悩んだ人がそれぞれに「三焦論」を残し、今にいたる。どれだけの先人が悩んだのか計り知れない。一人で一つの三焦論というのが一般的である。奇事なことに張介賓は二度、先に『類経附翼』で、後にこれを訂正する形で『質疑録』で論じている。

1956年に金関丈夫は三焦論を『福岡医学雑誌』に発表した。三焦論の集大成であ

ろう。『日本民族の起源』（法政大学出版局）に収載されているのでぜひ読んで頂きたい。残念なことがある。

①『靈枢』を偽作とみて調査の対象にしないで、『靈枢』の文章はすべて『甲乙経』から採録していること。鍵詞新解で述べたように、「三焦」は「経脈」や「衛気・営気」とは切って切り離せないものである。よって三焦を論ずるに、どうしても「経脈」なり「衛気・営気」の基礎は欠くべからざるもので、単独に三焦を論ずることは狭見となろう。『靈枢』全体の医学というものを踏まえる必要がある。

②いくつかの重要な著作をみれなかったこと。吉村恂益著『二火弁妄』（1703自序）と稲葉通達著『三焦営衛論』（1760自序）のふたつである。他に『質疑録』の張介賓の「三三焦論」もみていないようである。

だからといって金関氏の論文の価値が減ずるというわけではない。この金関氏の論文を核に、採用されなかった三焦論を紹介し、若干の知見を加えながらこの連載を進めようと思う。

金関氏の以降の三焦論は知る限り次がある。

①柴崎保三「三焦に就いて」、『漢方の臨床』15巻1～4号、昭和43年。

②八木萌「『難経』の三焦について」、『原塾塾報』2号、1985年。

同「『難経』の三焦命門論」、『日本経絡学会誌』13号、1986年。

③これは手元にないが、『章太炎生平与学术』（三聯書店、1988年）の中で、俞樾・孫詒讓等に師事し考証学を受け継いだ章太炎（1869-1936）の三焦論の一部が紹介されている。『猝病新論』（1957年）に収録されているらしい。そのいくつかは『宋元明清名医類案』（1936年）の付録として収められているとも書かれている。ご存知の方はぜひお教えてください。これに限らず三焦論に関する情報もご提供下さい。ちなみに『二火弁妄』は井内女史よりわけていただいたものです。

さて、何から始めようか、と悩んで多紀元簡『六節蔵象論識』をみれば「・・・

およそ経にはみつつの三焦が論じられている。このことについては張介賓の『質疑録』に詳しいので参照されたい」とある。これに従って第一講は張介賓の説を紹介することにする。さきに張介賓はふたつの三焦論を提出しているとした。ここで紹介するのは後で発表した「論三焦有幾」なる論文である。現代語に意識しよう。

三三焦論（張介賓『質疑録』(1)）

身体には12の蔵府経絡がある。これについては『素問』『靈樞』に詳しい。この中で「三焦」と名づけられたものだけが、経典においても憶説があり、後代の学者においてもさまざまに論じられているが定論にはなっていない。もう少し突き詰め、基本となる考え方をここに正そうと思う。

李東垣の高弟である王好古(2)は「三焦」に疑問をもち、「三焦というものに幾つあるか」と問題提起。三焦論に挑戦し考究したが定説的なものは作り出せなかった。

そこで経文と諸先輩の論説を参考にしながら、後人が明らかに出来なかったために議論百出した、みつつの三焦について確認しようと思う。まず経文からみてみよう。『素問』『靈樞』の三焦と『難経』の三焦は同じものではないことに注意したい。

三焦者、上合于手少陽、出関衝、小指次指之端。三焦下脘、在足大指之前、少陽之後、出關中外廉、足太陽以絡于手少陽。（『靈樞』本輸）

ここでいうのは手の少陽三焦経の流注である。

臍下膀胱至足、為足三焦。下焦別回腸、注膀胱以滲入。（『靈樞』本輸）

ここでは足の太陽の膀胱は三焦という腑に所属することを言っている。手の三焦の経脈は少陽であり上部を主り、足の三焦の腑は膀胱であり下部を主る。このことを「二三焦(ふたつの三焦)」という(3)。

密理厚皮者、三焦膀胱厚。粗理薄皮者、三焦膀胱薄。（『靈樞』本藏）

勇士、三焦理横。怯士、三焦理縦。（『靈枢』論勇）

胆胃大小腸三焦膀胱五者為天氣之所主。夫三焦膀胱与胆胃大小腸四府并言。

（『素問』五藏別論）

他にも厚薄・直結・縦横の違いがあるが、これはまさに形状を有する腑の三焦である。さて三焦を次のようにあらわす場合がある。

上焦如霧、中焦如漚、下焦如瀆。（『靈枢』營衛生会）

これは一氣が統括するところの三焦で、『難経』では次のように説明される。

上焦在胃上口、主内而不出、其治在膻中。中焦在胃中脘、主腐熟水穀、其治在臍傍。下焦在臍下、主分別清濁、出而不内。（『難経』31難）

この31難でいう三焦は、上述の一氣統括の三焦、つまり霧・漚・瀆の三焦である。『難経』ではひきつづき次のように説明している。

三焦為水穀之道路、氣之所以終始。三焦者、原氣之別使。原氣在兩腎中間之動氣、為人之生命、十二經之根本、主通行三氣、經歷于五藏六府。

ここで言う三焦は氣に属し、王叔和のいう「有名無状」の三焦である(4)。以上のことが「一三焦(もうひとつの三焦)」である。

総括すると、①経脈でいえば手の少陽が三焦で上部を主り、②腑でいえば足の太陽が三焦で下部を主り、③氣でいえば腎間の原氣が三焦であり中部をめぐる。これが三つの三焦である。上述のように『素問』『靈枢』の三焦と『難経』の三焦は違うのである。『素問』『靈枢』でいうのは手の少陽の三焦と足の太陽の三焦で、有形の腑といえよう。『難経』のいうのは上中下の三焦で、無形の原氣である。有形の腑は胆・胃などと対応し、無形の氣は五藏六府をめぐる、分肉をあたため皮膚にあつまる、つまり腎間の原氣で上・中・下焦である。李東垣のいう「有名無形の、全身の氣を統括するもの」であり(5)、皮膚を薫じ毛髪を潤し全身に布散するものである。

すでに述べたように、王好古は「三焦にはいくつあるか」と自問し、手の少陽三焦が上を主り、足の太陽三焦が下を主ると考えた。しかし、『難経』のいう原氣の

三焦・命門の別使については言及しなかった。よって後人はこれを疑問視したがわからなかった。だから王叔和のいう「無状空有名」なる三焦が腎間の原気の三焦であるという考え方がまったく間違いとはいえない。

陳言は臍下の「脂膜」をが三焦であると考え(6)、袁淳甫は色が最も赤い層が三焦と考え(7)、虞天民は腸胃を包涵するもの、つまり「腔」なるものを三焦と考えている(8)。これらの説は一考に値しないだろう。金・一龍舎(9)は手足の三焦を前三焦・後三焦というが、これは妄説ではないだろうか。

初め、私は『靈樞』背膈の、

肺膈在三焦、心膈在五焦、膈膈在七焦、肝膈在九焦、脾膈在十一焦、腎膈在十四焦。

この文章にもとづき身体の外称を焦と考え、虞天民の五藏六府を包む脂膜に依拠して三焦論を提出した(10)。また馬仲化は上述の肺膈・心膈の焦を椎と考えている。允当であり検討に値しよう(11)。

これが『質疑録』に載す「三三焦論」の全貌である。拙訳のため理解しづらいかもしれないが、理路整然として簡潔で、スタート台としてはまあまあよいレベルであり、元簡先生が推す意がここにあったかも知れない。

張介賓は上・中・下の三焦は『難経』の三焦であるようにいうが、この考え方はすでに『靈樞』において確立されたもので、この意味では『素問』『靈樞』『難経』の違いはないと考えられる。

張介賓説では触れていなかったが、もうひとつの三焦というものがある。人体を上中下の三つに分けていう場合がある。横隔膜から上肢・頭部を含めて上焦、横隔膜から臍の高さまでを中焦、臍から下肢を含めて下焦という場合がある。また四肢・頭部を含めなくて、胸腔を上焦、腹腔を臍で分け上腹を中焦下腹を下焦という場合もある。医書を読む場合、これらのことを勘案する必要がある。

【注】

- (1) 張介賓(1563-1640)『質疑錄』。もとは「論三焦有幾」なる題の論であるが、ここでは通称の「三三焦論」をもちいた。
- (2) 王海蔵(1200?-1264)『此事難知』「問三焦有幾」。
- (3) ここまでは、注(2)の「問三焦有幾」の「二三焦」を説明している。
- (4) 王叔和(3c)『脈経』。
- (5) 金・李杲(1180-1251)『医学發明』。
- (6) 宋・陳言(1131-1189)『三因方』「三焦精府弁正」。
- (7) 未詳。
- (8) 虞博(1438-1517)『医学正伝』「医学或問」。
- (9) 未詳。
- (10) 張介賓『類経附翼』「三焦包絡命門弁」。
- (11) 馬玄台(16c)『難経正義』、未見。孫一奎(1552-1619)『医旨緒余』「難経正義三焦評」に援引される。

活 動 報 告

◆『靈枢講義』試読会

報告者 重岡 恵

日時 毎週火曜日午後7時より 会場 池袋・島田鍼灸院

- 6/04 「官針」中の「凡刺之要～取以鍼針」の頭注、脚注、双行注を宮川先生を中心に全員で勉強した。
- 6/11 宮川先生を中心に全員で「寒熱病」を通読した。
- 6/18 「官針」中の「病痺氣暴発者～則取痺也」の頭注、脚注、双行注を宮川先生を中心に全員で勉強した。
- 6/25 『医方大成論』の中の霍乱、秘結、咳嗽を宮川先生を中心に全員で勉強した。
- 7/02 「官針」中の「凡刺有十二節～以治寒氣之浅者也」の頭注、脚注、双行注を宮川先生を中心に全員で勉強した。

◆医経考証部会

報告者 山本朝子

日時 毎週水曜日午後7時より 会場 池袋・井上鍼灸院

- 6/19 『素問紹識』脈要精微論篇第十七の校正をする。
- 6/26 元堅の引用した文献の出典を調べる。
- 7/03 『素問紹識』に関する資料を整理するための手順を決める。
- 7/10 元堅の引用する書名、人名について考察する。

三焦新解（その2）

前回の張介賓の「三三焦論」よって三焦についての大概を伺うことが出来た。

- ① 手の少陽の経脈としての「三焦」
- ② 足の太陽の腑としての「三焦」
- ③ 上中下の「三焦」

と三焦をみつつに分類できた。さらには、

- ④ 身体を三分した（横隔膜以上、それと臍の間、臍以下）「三焦」

の言い方がある（④にしても手足を含めるか含めないかによっても区別がある）。

このようにみても、三焦というものが一筋縄ではいかないことがわかるはずだ。金関氏によってようやく系統的に明らかにされたのである。何故いま三焦をほじくるか。単に三焦の実体を探るのが目的ではなく、実は12経脈の考え方、つまり『鍼経』経脈なる篇と密接に関わっているからである。もしかしたら『内経』生理学の一端を垣間みることができるかも知れないからである。一般に経脈篇というと経脈の流注と病証だけに目がいくが、前後の篇をよんでみると三焦ととても関係が深く、同時に補寫の考え方にも大きく関与していることがわかる。そうするともう少し経脈レベル、補寫レベルから三焦とは何かと追求してみる必然が生じるわけである。

さて、今回は1989年に中医古籍出版社から発行された『中国病史新義』から範適（字行準、1906生）の説を紹介しよう。解剖・生理から内科・外科などにあらゆる角度から解説を加えた著作である。「あらゆる」とは甲骨・金文、『説文』および経伝の中から引用してその証としていることを意味している。この中の第10章「腹膜（三焦）」から抄訳してみよう。同氏には『中国医学史略』（中医古籍出版社）などの著がある。

腹膜（三焦）

範適

消化器系に属する三焦の有無については、現在なお未解決であり(1)、さらに名称の由来に遡ることも難事である。『内経』などからみても、確かにひとつの臓器である。それが今いう「腹膜」に相当するのではないかと考えている。これは胸膈から胃・肝・大腸・小腸・大網膜・膀胱などの腹腔内臓器をつつむ皮の袋状の大きな膜である。その上部は胸膜、つまり膈である。先に張介賓は「ひとつの府があることは判明している。蔵府の外側・体表の内側にあつて蔵府を包み込む、腔の中の大きな府である」と三焦を解釈していて『難経』の「有名無実」説に反駁しているが、これは正しいといえよう。なぜなら後漢の『白虎通』ですでに「三焦は包絡の府である」と説かれているからである。

諸書にみえる三焦の形態や所在にかんする論述はそれぞれ異なっている。『白虎通』情性篇に「三焦者、包絡府也。水穀之道路、氣之所終始也」とあり「上焦若竅、中焦若編、下焦若瀆」と続いている。別のテキストでは「三焦亦以湊液吐故也、上焦若霧、中焦若滿、下焦若瀆」と作るが(2)、「霧」は「竅」の「滿」は「編」の誤りで、原本と随分違っている。『鍼経』本藏に「密理厚皮者、三焦膀胱厚、粗理薄皮者、三焦膀胱薄」とあり、『鍼経』論勇には「勇士者三焦理横、怯士者三焦理縦」とある。解剖的には腹腔では布状の腹膜（壁側腹膜と臓側腹膜）が入り口があつて底のない皮袋の形状を呈している。『鍼経』營衛生会にいう三焦も現在の腹膜にほぼ相当する。次のようにいつている。「上焦出于胃上口、并咽以上貫膈而布胸中・・・中焦亦并胃中、出上焦之後・・・下焦者、別回腸、注于膀胱而滲入焉」と。

『難経』が編纂された時代や『外台秘要方』が謝士泰の『刪繁方』を引用するときには、いくつかの類似の説があつたはずであるが(3)、『白虎通』の三焦の生理・形状については触れていない。腹膜は胸膈以下に在るものであるが、『鍼経』や『難経』などでは胸腔以上の膈膜を上焦とし、『傷寒論』や『金匱要略』などでは膈以上を上焦、臍以上を中焦、臍以下を下焦としている。これらの見方は「膈背」

ということばと混交している可能性がある。『素問』欬論の王冰の注では手の三焦経の流注を「上焦者、出於胃上口、并咽以上貫膈、布胸中、走腋」としているが、「腋」は「腹」の形誤であり、結局、経脈の流注している区域をを三焦の分布区域と考えてしまっているのである。

宋の陳言は「臍下の脂肪が三焦である」というが、『素問』腹中論の「其氣溢於大腸而著於育、育之原在臍下」とあり育の原の所在の臍下を誤って三焦と考えたのである。明の虞搏は三焦を誤って「五藏六府を包むもの」とし、「三焦は腔子を指す」「その形体には膜がある」などというが間違っている。これによって後に唐宗海が三焦を「網膜」としているが(4)、一部私の説と符合する点がある。

つまり腹膜は腹腔中の臓器を包み臓器を隔てているところの「包絡」であって、よって形態は単一ではないが大概はひだ状になっていて、ものによっては網状になっている。よって「焦」というのである。「焦」字はなめし革「韋」を意符とする「韮」がもとの字である。『説文解字』5下韋部に「韮、収束也、从韋糶網(5)、読若曾」とあり、「収束」には「圍束」の意味があり、よって「韋」に意味がある。「読若曾」とは清の桂馥は『札朴』巻9郷里雜言の「収束曰韮」に注して「抽のように発音する」といい、ここでは「韋」ではなく「臬」が意符となっている。『説文解字』5下韋部に「韋、相背也、从舛口声、獸皮之韋、可以束枉戾……」とあり、まさに「皮の袋」と合致している。

『玉篇』は「韮」に「堅縛」の意味をもたせ、『白虎通』の「中焦如編」の織物と重複し、非常にはっきりとひだ様の腹膜を意味していることがわかる。『新選字鏡』巻9では卷・聚・斂・孳などの意味をもたせている。「韮」の古文は「韮」に作り、先秦においてすでに臓器を意味する字であったことが知れる。米・要・焦ら成る字で、「米」は胃腸の中の食糜を表し消化作用と関連し、「要」は竹の節の「約」と同じで「韋」とともに約束・包囲の意味があり、腹腔の臓器を包む皮層の生理を表している。同時に「焦」には「縞(しわ)」の意味があり、先秦の文献である『戦国策』の魏策に「魏王欲攻邯鄲、季梁聞之、中道而反、衣焦不申」とみえ、

この「焦」は衣服がよれた様を指し、高誘の「此於行路犯風日、故焦、焦故不申、需潤乃申耳」なる注がその証となろう。ちなみに「潤」は「摺」の誤りではないだろうか、詳細は『生殖器病学新義』をみられたい。つまり「糞」が「焦」を意符とするのは腹膜のひだを指す。「焦」にはさらに細かい孔の意味がある。『周礼』春官に「菴氏掌共燧契」の職があり、杜子春は「燧読為細目燧之燧」といい、亀を炙って得られる卜兆の模様を指し、これは腹膜のしわとよく似ている。よって「焦」の声義が「糞」と通用するばかりか(5)、さらに細かい目なる意味もあるのである。当時では臓器を包む腹膜、靱帯でできたひだのある膜をみて、『素問』ではこれを「盲膜」と称するが、この腹膜を総じて「三焦」と称したのである。これは現在腹腔を上中下に三分して器官を所属させているのとよく似ている。「焦」字だけでは「糞」字の意味に及ばず、充分とはいえない。

■これですべてではないが範氏の説の主な部分を意識してみた。こうして訳出すると長所と短所が見えてくる。折角だから皆さんにもご覧いただくというわけである。ざっと読んでなかなかおもしろいぞと思ったが、丁寧に出典にあたってみると的はずれのような気がする。

①『白虎通』の「三焦者包絡府」のことばを第一の拠り所とし、この「包絡」を「包み絡う」と解釈しているが、実際は「心包絡」をさしている。前後の文例からも明かである。例えば「胃者脾之府」「膀胱者腎之府」「胆者肝之府」とある。なぜひとり三焦だけ「包絡する府」と読めようか。

②「焦」が「糞」字に通用していることを第二の依拠としているが、単に声符が同じであるだけで、通用例を挙げるわけではないので通用するかどうかはなはだ心許ない。さらに古文として「糞」字をあげ「从米从要从焦」と会意字に解釈しているが、『説文解字』の挙げる重文は「或从要」というだけで、「从米」「从焦」とはいつていない。つまり『説文解字』によれば「糞」字は「韋」＋発音を示す「糞」、重文の「糞」字は「要」＋発音を示す「糞」からできている。範氏は後者の発音を

示す「糲」を意識的に「米」「焦」のふたつの意符に分解したのである。自説のために。

範氏の説が正しいか間違っているかは、三焦それ自体不明なのであるから、わからない。参考意見として保留して後学に備せん。

■長浜善夫著『東洋医学概説』（創元社、187ページ）に三焦について数家の説を紹介している。

- ①内分泌臓器の総称（杉原徳行教授）
- ②胸膜・腸間膜・腹膜（趙憲泳その他）
- ③上焦は胸腺、中焦は脾臓、下焦は乳糜槽とそれに注ぐ乳糜管（三谷公器）
- ④脾臓（矢数道明）

と主なところを紹介している。

■前回ふれた章太炎の三焦説（『宋元明清名医類案』上海書店の付録として載せるいくつかの説）では「淋巴腺」といい、今いう「胸管」は上焦・中焦に相当し、下部にある淋巴管が下焦に相当し、総じていえば三焦は「腺」である、ともいつている。

■ここで紹介したいくつかは、強いて現代医学にいう内臓器官に当てはめた場合の順当な説であろうとおもう。しかし、既述したように上焦から衛気、中焦から衛気が発生するのであるが、例えば腹膜はこのようなたらきをするのだろうか、脾臓はどうだろうか。こう考えてみると敢えて現代医学と重ね併せることは必要ないかも知れない。

【原注】

- (1) 王叔和『脈経』は三焦を有名無状とし、『難経』は半有形半無形の臓器とし、これによって論争が惹起されている。
- (2) 玄応『一切経音義』巻20『陀羅尼雜経』第2巻所引による。後人は『難経』に従って改めている。孫詒讓『札』巻10『白虎通徳論』では玄応所引文によって盧

文昭校本の正しさを証明している。

(3) 『素問』欬論の王冰注および『難経』31難、『外台秘要方』巻6所引『刪繁方』を参照。

(4) 唐氏著『金匱要略浅注』をみよ。

(5) 縑・焦・黹は古くは宵部にあり、後に縑は宥部に所属する。(訳注：『説文解字』を「从韋糶網」と引くが「从韋糶声」の誤りであろう)。

夏期合宿の報告

日本内経医学会の夏期合宿は8月24、25の両日、真鶴の「民宿・琴ヶ浜」で開かれ、シンポジウムと懇親会および研究発表が行われました。参加者は大人26人、子供3人。

第一日(午後1時15分～4時45分：シンポジウム、6時～：懇親会)

シンポジウム「古典と臨床」(その2)『古典とは何か』

進行：梅木昭広、総司会：島田隆司、司会：津曲奈穂子

シンポジスト：井上雅文、小川卓良、左合昌美、篠原昭二、宮川浩也

今年は外部から、篠原昭二先生(明治鍼灸大学助教授)と小川卓良先生(日本経絡学会常任理事)をお招きし、昨年のテーマを引き継ぎ「古典と臨床」(その2)について、視点を原点にもどし、先ず古典とは何か、何を指して古典と言うのか、又どのように取り組むのか、そして従来 of 古典主義の問題点は何か、最後に今後の臨床とのかかわりについて、各シンポジストの立場からの発表があり、後半は質疑応答で充実したシンポジウムでした。

懇親会では、今春天皇皇后両陛下が明治鍼灸大学を訪問された時のスライドを篠原先生の説明を聞きながら拝見したり、カラオケを楽しんだり、シンポの議論を続行するなど、翌朝近くまで飲み会は続いたようです。

第二日(午前9時30分～10時30分：研究発表)

①「馬刀挟癭について」津曲奈穂子

ニンニク灸を用いて頸部リンパ腺腫を完治させた治療過程を、古典から得た知識を応用してわかりやすくまとめたもので、古典と臨床とのかかわり方を知る一助となりました。

②「『内経』補瀉考(その2)」宮川浩也

胃気、衛気、營気を中心にまとめた補瀉論。補瀉についての質問に対する回答の中で、呼吸の補瀉は従来 of 「息を吐きながら、又は息を吸いながらではなく、息を吐ききった時、又は息を吸いきった時」という意味の記載が「内経」にあるとの答えがあり、臨床的にも納得がいくものでした。(重岡恵・山本朝子記)

三焦新解（3）

三焦について皆なやんでいたことを少しはお分かりいただけたでしょうか。これほどに三焦の実体は謎めいて、それに対してさまざまに論を展開しているようすが少しは覗けたと思います。今回は時代は前後しますが稲葉通達撰の『三焦營衛論』*1を紹介しましょう。稲葉通達については石田秀実氏の『素問研』の解説および小曾戸洋氏の「日本における『内経』の受容の経緯（7）」（『内経』33号）に詳しいので、ここではすぐさま（序文も省略して）本論に取り組みたいと思います。正確に読みたい方は直接原本にあたってくださいとして、ここでは意識して全体の意味が理解できるよう努めてみました。部分的に難解なところがありましたが、前後の文意にしたがって訳しました。書中の「素霊」という句はすべて「内経」と表しました。前2回で紹介した文章は少し短いものですが、今回はややヘビーであります。2回に分けます。

三焦營衛論

稲葉 通達

三焦營衛は身体のかなめであり、『内経』の要義である。これに通曉しない者をどうして医と呼べようか。

人が生まれ育つに、嬰兒は乳にたよっている。成長しては食物にたより、つまり五味が胃に入ることによって生命を保持しているのである。そもそも肉体の中には五臓六腑があり、外は四肢百骸がある。はなはだ広大なものである。しかし、胃は五味を受納し、それを広大な身体に送り届けているのである。これには委輸(はこぶ)・運行(めぐる)の力に依っていることは明白であろう。かりそめにも医工でありながらこのことが判らないなら、脉は診てはいけないし、病気を診てもいけない。針を刺すことも薬を投ずることもならない。古法が三焦營衛を要義としているのはまさにこの理由によっているのである。

三焦營衛については『内経』に詳細に記載されている。しかし古書であるがゆえに衍誤脱倒が含まれている。したがって、読む者によっては経文の意味を深く探ることができなかつたり、時にはこじつけ、時には誤りをそのまま受けとめ真意を失ってしまう者もある。私は30年間『内経』を研究してきた。よっ

てある程度理解できたと思う。そこで個人的な見解を述べてみたい。

三焦とは胃の竅隙(すきま)である。すなわち營衛・水穀の委輸・運行のみちすじである。營気は中焦より発生し、衛気は上焦より発生する。人は水穀から気を授かり、その水穀の注入するところが胃である。水穀が口から入り胃に納まる。津液を蒸らし、精微を化(つくりだす)す。これが肺に運ばれ、血に変わり、経隧をめぐるのである。これが「營」という。人間の生命のうちでこれより貴いものはない。營が中焦より発生するというのは、そのみちすじが胃中にあり、上焦の後ろを通り、上って肺に注ぐのである。このことを「中」というのである。だから、『鍼経』五味論(63)で、

血脈者中焦之道也。

というのである。

水穀の精微がめぐる。その慄悍滑利(すばやい気)なるものは開發(のびひろがって)四肢をめぐり、肌を温め、膚を熏(ふす)べ、身に充ち、毛を沢(うるお)すはたらきをする。この気は分肉の間をめぐるもので、脉の中には入ることはできない。これを「衛」という。衛が上焦より発生するというのは、そのみちすじが胃の上口・中焦の前にあり、咽(のど)に並びて上行するのである。このことを「上」というのである。

『鍼経』營衛生会(18)に、

營出中焦、衛出下焦。

とある。下焦の「下」は「上」の誤りである。諸家の注解や方論は上述のことに不明であるため、衛気は下焦から発生するものとし、上焦には「宗気」をあてている。『内経』に未熟なるがゆえの誤りである。謝士泰の『刪繁方』*2や孫思邈の『千金方』では「營出中焦、衛出上焦」となっているからである。もう少し他の篇から証明してみよう。先ず『鍼経』から。

上焦泄氣、出其精微慄悍滑疾。 平人絶穀(32)

上焦開發、宣五穀味、熏膚充身澤毛、若霧露之漑。是謂氣。 決氣(30)

上焦如霧。 營衛生会(18)

衛氣者、所以温分肉充皮膚肥腠理司開闔者也。 本藏(47)

上焦者受氣而營諸陽者也。 五味論(63)

上焦出氣、以温分肉而養骨節通腠理。 癰疽(81)

次に『素問』から。

陽受氣於上焦、以温皮膚分肉之間。今寒氣在外則上焦不通。調經論(62)

また『鍼経』から。

上焦出於胃上口、並咽。以上貫膈而布胸中、走腋、循太陰之分而行。還至陽明上至舌、下足陽明。常與營俱行於陽二十五度、行於陰亦二十五度、一周也。故五十度而復大會於手太陰矣。 營衛生会(18)

衛氣者出其悍氣之慄疾、而先行於四末分肉之間、而不休者也。晝日行於陽、夜行於陰。常從足少陰之分間行於五藏六府。 邪客(71)

衛氣之行、一日一夜五十周於身。晝日行於陽二十五周、夜行於陰二十五周。 衛氣行(76)

衛者水穀之悍氣也。其氣慄疾滑利、不能入於脉也。故循皮膚之中分肉之間、熏於膏膜、散於胸腹。 周痺(27)

浮氣之不循經者爲衛氣。 衛氣(52)

どうです、これで衛氣が上焦から発生することを証明できたでしょう。だから、「衛出下焦」の下が上の字の誤りであることは疑問の差し挟む余地はありません。宗気というものは、營衛は兩焦をめぐるものであるが、その大気があつまつてめぐらず胸中にたまつたものである。これを気海という。上は肺に出て喉嚨をめくり心脉を貫き呼吸をつかさどり、下は気街に注いでいる。ゆえに「膻中」は宗気の海であり、宗気は実は上焦・中焦の余剰分である。

(上焦・中焦はわかったが)下焦の位置はどうなっているのだろうか。これも経文を列挙して説明しよう。

三焦者決瀆之官、水道出焉。 『素問』靈蘭秘典論(8)

下焦者如瀆。 『鍼経』營衛生会(18)

三焦者中瀆之府也、水道出焉。 『鍼経』本輸(2)

下焦者、別廻腸、注膀胱、而滲入焉。故水穀者、常並居於胃中、成糟粕、而俱下於大腸、而成下焦滲、而俱下濟泌別汁、循下焦、而滲入膀胱。

『鍼経』本輸(2)

下焦下溉諸腸。 『鍼経』平人絶穀(32)

水穀並於腸胃之中、別於廻腸、留於下焦。不得滲於膀胱、則下焦脹。

『鍼経』五 津液別(36)

これらによって下焦の位置について理解できよう。つまり、上焦は胃の上口、中焦は胃中、下焦は膀胱の上に位置しているのである。このみつつの竅(あな)はいづれも水穀の委輸・運行のみちすじであり、胃がそのまとめ役を担っている。よって『鍼経』平人絶穀(32)ではつぎのようにいつている。

胃。大一尺五寸、径五寸、長二尺六寸、横屈。受水穀三斗五升、其中之穀留二斗、水一斗五升、而滿。上焦泄氣、出其精微慄悍滑疾。下焦溉諸腸。

ここでいう上焦は中焦を兼ねていて、胃の府が中央をつかさどり土に属していることを解説している。だから胃について語るときに「中」という意味が含まれていることは論をまつまでもない。「精微」とは中焦の營氣を指し、「慄悍滑疾」とは上焦の衛氣を指している。平人絶穀では次に小腸・廻腸・廣腸の度量について述べている。三焦は胃の次に解説されていることから、胃が三焦のまとめ役であることをみてとれる。

上焦と中焦がともに胃中より起こり、下焦とはかなり離れていることから、『鍼経』五味(56)や五味論(63)では「上之兩焦」「胃之兩焦」と表現している。これによって平人絶穀で上焦が中焦を兼ねていることを説明できよう。

『素問』靈蘭秘典論(8)や『鍼経』本輸(2)などで「下焦」を指して「三焦」といつていることについて。「上之兩焦」は胃中に在るものであって、他のところに在るわけではない。ただ下焦だけが膀胱の上に位置しているだけである。このことから、營衛について述べる場合は上の兩焦を主とし、三焦の位置について語る場合は下焦が主となるのである。『内経』の要旨はここにある。『難経』31難に、

三焦者水穀之道路、氣之所終始也。上焦在心下下膈、在胃上口。主内而不出。其治在膻中、玉堂下一寸六分、直兩乳之間、陷者是。中焦者在胃中脘。不上不下。主腐熟水穀。其治在臍傍。下焦者當膀胱上口。主分別清濁。出而不内、以傳道也。其治臍下一寸。故名曰三焦。其府在氣街。

とある。思うに『難経』は偽撰(にせてつくった)である。ただし古(いにしえ)を去ることあまり遠くはないが。三焦を論ずるに「水穀之道路」と表現しているのは言い得ている。また下焦を「當膀胱上口、主分別清濁、出而不内、以傳道」というのも適切である。ただし上焦を「主内而不出」というのは誤りである。大抵、『難経』の説は營衛の深奥なる理論には到達していない。ゆえに三焦をいう場合三氣にもとづいて論を立てることができないのである。ただ水穀の伝化を主としていること、「氣之所終始」という語、38難の「主持諸氣」や66難の「主通行三氣」などの語が宗氣、營氣、衛氣を指していることなどに問題がある。さらに(66難に)、

臍下腎間動氣者人之生命、十二經之根本、故名曰原。三焦者原氣之別使、主通行三氣、經歷於五藏六府。原者三焦之尊號也。

とあり、腎を尊んで胃を卑(いや)しんでいる。これ(尊腎卑胃)は『内経』には無い考え方である。これがために『難経』は信據するに足りないのである。

『難経』以降についてはなおさらである。宋以降の論説も脹論(35)の「胃之五竅閭里門戸也」に大いに窮している。どうして一緒に三焦營衛の意味を語ることができようか。三焦營衛だけではなく、『内経』の古義をば『難経』が先に失い『脈経』が続いて失っている。だから議論が出れば出るほどその意味(『内経』の古義)からいよいよかけ離れてしまい、ついには後人がこの誤りを承けるため益々疑団が生じてしまうのである。『内経』には詳細に論ぜられている、これを再び遺瀝(前人ののこした奥義)としてはならない。学ぶ者は専心にして考究すべきではないだろうか。(『三焦營衛論』前半了)

訳が稚拙であるため上手くいわんとするところを伝えられない恨みがある。それでも張介賓や範行准とは違って、『内経』から引証している点に信があることを理解していただければ目的達成。

前半を読んで、三焦をいう場合はどうしても營衛と切り放せないことが判ったはずである。よって『三焦營衛論』という書名になっている。張介賓にしる範行准にしる、他の論者にしる、三焦を論ずるときに營衛についてふれないことが多い。両者の関係については特に『鍼経』に詳しいこと、さらに12経脈とも関連深いことなども含めて、三焦を論ずるには広い角度からみる必要があろうと思う。

これで半分であるから長大な医論というわけではない。先哲の論を紹介しながら論をすすめればよいのだが、意に添わなかったのだろうか。『素問研』をみれば、彼が前人の業績を全く無視するはずがない。

彼の論意「三焦・營衛の関係」を表明している医論ははなはだすくなく、ここにこの論をまとめた素志があろうと思う。

次回は後半を、その次には「三焦營衛対問(Q&A)」を予定している。

*1 武田杏雨書屋蔵、全一冊。1761年自序。三焦營衛論、三焦營衛対問、(附刻)脈論の3部で構成されている。

*2 伏書。おそらく『外台秘要方』巻6三焦脉病論に引く同書を指す。

三焦新解（4）

三焦營衛論（続）

つづいて營衛のめぐりについて論じよう。

水穀が胃に入り津液を蒸らして精微を作り出すが、それは氣であって単なる水穀の精である。どのようにして營・衛に分けるのか。

三焦は氣を作り出し、氣は肺に伝わってその後、營・衛に分れるのである。

氣というものは陽に属して無形のものである。無形であるが故にめぐらないところがなく、あらゆるところに注ぐのである。

血は陰に属し有形である。有形であるが故に道がなければ流れない。そもそも水穀の精微が変化して血となると肺から手の太陰に注ぎ、さらに手の陽明をめぐり、上って足陽明に注ぎ下行して足の太陰と合す。脾から心に注いで手の少陰をめぐり手の太陽に合す。また上行して足の太陽に注ぎ足心にいたる。足少陰から腎に注ぎ、腎から心外に注ぐ。そして心主の脈をめぐり手の少陽に合す。上行して膻中に注ぎ三焦に散ず。胆に注ぎ足の少陽をめぐり下行して足の厥陰に合す。そして肝に至り、上って喉に入り肺に注ぐ。その支脈は督脈となり額上から に至り陰器をめぐって腹に入る。さらに欠盆にゆき肺中に注ぎまた手の太陰に出る。これを一周というのである。營氣は止まることなく陰陽の経を環(たまき)の端無きが如く(めぐりめぐってきわまるところがなく)貫流している。一昼夜で全身を50周して、ふたたび手の太陰にあつまるのである。これが營氣である。

盛んで無形の氣は脈中から溢れ脈外に散じあらゆるところをめぐっている。この氣というのは上升し浮き上がる性質があり、専ら外を守るはたらきをする。上升性があることから、頭部にのぼり、咽をめぐり、孔竅にはしり、眼にゆくのである。浮上性があることから、分肉を温め、皮膚を充たし、腠理を肥えさせ、毫毛を潤すのである。これが衛氣である。

のぼって眼に出ることによって足の太陽の経に入り、背をめぐり下って足の小指の端にいたる。そして足の心に入り内踝に出て、足の少陰の分間より躡脈に入りそして眼に合するのである。日中の陽の25周ののち夜は陰を25周するのである。それは、また少陰の分間より腎に注ぎ、腎から心に注ぎ、心から肺に

注ぎ、肺から肝に注ぎ、肝から脾に注ぎ、脾からまた腎に注ぐのである。これを25周し、そしてまたまた眼に合するのである。このことを衛気が常に營気とともにめぐるといっているのである。

營気が流れていることは確認し易く、有形。衛気が布散していることは察知しがたく、無形。この『内経』の経義に不明であれば放漫としてきまりがないようなもので、注釈家が誤り、現在においても解明されない所以である。

『鍼経』衛氣行(76)に、

平旦陰盡、陽氣出於目。目張則氣上行於頭、循項、下足太陽、循背、下至小指之端。

とある。ここでは衛気の陽分の正行をいっている。つまり陽蹻脈である。続いて、

其散者、別於目銳眦、下手太陽、下至手小指之間外側。其散者、別於目銳眦、下足少陽、注小指次指之間、以上循手少陽之分側、下至小指之間。別者、以上至耳前、合於頷脈、注足陽明、以下行至跗上、入五指之間。其散者、從耳、下手陽明、入大指之間、入掌中。

とある。ここでは衛気が目から別れて散布することをいう。ただし陽蹻脈(正行するもの)の余気(余分の衛気)であるから、布散したきりで循環しない。さらに、

其至於足也、入足心、出内踝下、行陰分、復合於目。故為一周。

とある。ここでは衛気の陰分の正行をいっている。つまり陰蹻脈である。馬蒔は上文の「下至小指之端」に対して、陰分は陰経を指し陽分は陽経を指すといい、さらに「一周」を50度(50回めぐること)と考えている。疏率(細かい事にまわらないこと)である。経文には、「一周」「三周」「五周」「七周」から「二十五周」に至って陽が盡き、陰がこれをうけ継ぐというという文章がある。つまり「一周」は「一度(1回めぐること)」である。營衛生会篇で「50度が1周である」といっているのとはわけが違う。さらに衛気が夜に陰を行るといっているのは陰蹻をめぐること、どこに衛気が陰経をめぐると書かれているのだろうか。張介賓の『類経』は馬蒔に較べれば明解であるが、経文の「其至於足也、入足心、出内踝」は上文の「至小指之端」を承けて正行の気が陰分をめぐっていることだが、このことを理解していない。

おおよそ衛気が常に營気とめぐるのは陰蹻脈・陽蹻脈の、いわゆる正行だけであって、手足の陽明・少陽および手の太陽は正行の余気が散布したものである。気は四肢・分肉・腠理・毫毛のいたるところに散布する。これは無形の性

質によるもので至るところに衛気はめぐるのである。経文に「不能入於脈」、
「與營俱行」とあり矛盾しそうであるが、矛盾していないことが判っていただけ
けたと思う。

衛気は夜に陰を行る。これは日没によって陽が尽き、陰が気を承けて足の少
陰の分間から腎に、腎から心に、心から肺に、肺から肝に、肝から脾に、脾か
ら腎に陽のめぐりのように25周する。陰が尽きて陽が気を受け、陰蹻脈によっ
て目にあつまる。以上が衛気の運行である。

われわれが、身体を養い生命を維持しているのはひとえに水穀の力により、
水穀がわれわれの養いとなり得るのは胃気の化(消化能力)による。古法がもつ
ぱらに三焦營衛を要義としているゆえんである。専心講究の必要性がここにあ
るのである。

■以上が稲葉通達の『三焦營衛論』の全貌である。論拠は『内経』から引証し
ているので信があるといえる。ただ、陽蹻脈・陰蹻脈のところがすっきりしな
いが(同じく稲葉通達の『素問研』では腹部・胸部の腎経は実は陰蹻脈である主
張する)。

■三焦論としてある程度まとまっていると思う。それも単に三焦だけを論ずる
のではなく、營衛とともに解説している点がまともである。既に紹介した2人
と論意がちがっているようである。

■三焦は上と下に先ず分けられる。

上—上焦と中焦—胃の両焦—水穀の消化—衛気と營気を発生

下—下焦(また三焦ともいわれる)—水分の調節

上の両焦は今風にいえば消化器系(狭い意味での)、下焦は泌尿器系。例えば、
消化は胃や小腸や大腸の仕事であるが、三焦論ではこれらは単なる器(うつわ)
にととらえ仕事は上焦と中焦が担当する。尿は腎臓でつくられ膀胱に溜められ
るが、三焦論では下焦で尿を作り出し膀胱に溜める。さらに下焦は尿を作り出
すだけでなく大腸の水分調節、さらには発汗(蒸泄も含めて)のための水分確保
も担当している。汗は衛気の調節の媒体で、体温調節の黒子である。この意味
では上焦と下焦は密接に関連している。どうですか、三焦はなかなか有機的に
できあがっているでしょう。

このつぎはQ&A。稲葉先生もなかなか凝り性のようです。

(皆生)

三焦新解（その5）

稲葉通達著

『三焦營衛論』 三焦營衛対問（前）

質問1

先生は『鍼経』營衛生会の「衛出於下焦」の「下」字は「上」字の誤りと断定しました。その引証も善いとおもいます。しかし、營衛生会篇の後段の「上焦出於胃上口、並咽以上貫膈而布胸中・・・」の文章が宗氣をいうのではなく衛氣を指している、と何故わかるのでしょうか。また、衛氣の行(めぐり)りは『鍼経』の他の篇でも明らかにしているが、この營衛生会篇と合致していません。だから、前賢らが経語をみだりに詮議し文字を改めることをしませんでした。でも、先生が衛氣であると確信するのは奈辺にあるのですか。

解答1

よく行き届いた質問である。「營衛生会篇が營衛の意味を論ずるものではない」とは前賢が解釈するところであって、また「この篇にはただ宗氣・營氣のふたつの氣の論と下焦の水瀆の説があるだけだ」という。私はこの説を疑問に思っている。また、その説では「衛氣は果たしてどこにあるだろうか」、「篇名と食い違うのではないだろうか」という。

そもそも、宗氣は膻中にあつまり呼吸をおこなうものである。もし宗氣が陽を25度、陰を25度めぐるといふなら、いったい何の氣が膻中にあつまり呼吸を行うのだろうか。

また『鍼経』衛氣行と(營衛生会篇が)「食い違うのではないか」というが營衛生会篇では衛氣の發生をいい、衛氣行では衛氣のめぐりをいうので食い違ってはいない。

衛氣は胃中の水穀の悍氣から發生し、咽に並行している。まず膈に上り胸中に布散する。そして腋に走り手の太陰をめぐり、手陽明に至り上って舌に達す。足陽明と合して人迎にくだる。これが衛氣の陽明の別行である。

『鍼経』動輸の解説も詳しい。おおかた衛氣は氣であるため、あらゆるところをめぐるのである。營血が周流するところは衛氣もこれに従うのである。広がりあふれ流散して分肉皮毛の間をあまねくめぐるのであり、經隧の中から洩れ出ることがない營氣とは異なる。ゆえに昼は出て陽經をめぐり、夜は入って陰藏にそそいでいる。その正行は足の太陽經で、そのほかの陽經は別行である。『内經』の論はよくわかるし、發明も最も詳しい。これに思いを馳せたい。

質問2

胃が三焦の総司でとすれば下焦は胃の下口に位置するはずだが、先生の援引する營衛生会・五癢津液別の兩篇では下焦は廻腸で別れて膀胱の上に在るといふ。また經には三焦は膀胱に所属するともある。とすれば下焦は胃からかなり離れていることになる。「胃が三焦の総司である」とは間違っていないだろうか。

解答2

『鍼經』本輸に「大腸小腸皆屬胃」とある。胃は水穀の海である。水穀が胃に入れば營衛が発生し、營衛が発生すれば宗気があつまる。その後、糟粕・水液が腸にそそがれ、廻腸において汁が絞られて、津液が保存される。大便は広腸から排出され、小便は膀胱から流れ出る。三焦のはたらきはここで尽きるのである。だから大腸・小腸は水穀の海中であつてそれを胃に所属されるのは適當ではない。

質問3

先生は、營衛の化生は上の兩焦が、三焦の位置でいえば下焦が基本となり、これが『内經』の要旨であるといわれました。とすれば、經にいう「三焦」には意味に區別があるのですか。

解答3

そうです。『素問』欬論に「三焦欬状、欬而腹滿不欲食飲、皆聚於胃、關於肺、使人多涕唾、而面浮腫氣逆也」とあり、これに対して王冰は「この三焦は手の少陽ではない。上焦と中焦を指している」といつている。「三焦が上の兩焦」だとは經文に「聚於胃、關於肺」とあることからわかる。王注は經意を得ているといえる。また『鍼經』經脈の、手の厥陰心包絡は「胸中に起こり、出て心包絡に屬し膈を下り三焦を歴絡」し、手の少陽の脈は「膈を下り三焦を循屬」といふ。この三焦は上の兩焦を指している。

下焦を三焦とするものは『素問』靈蘭秘典論の「三焦者決瀆之官、水道出焉」がそれあり、『鍼經』營衛生会の「下焦者如瀆」なる記述と符合している。『鍼經』本藏の「腎合三焦膀胱」も同じです。

このように三焦とあつても上下の文意から含義に區別があります。ちなみに、決瀆は央瀆の誤りであります(訳注：説は『素問研』オリエント社の42頁にみえる)。

質問4

先生は『鍼經』經脈の「歴絡三焦(手厥陰)」「循屬三焦(手少陽)」の三焦は「上の兩焦」だといわれました。しかし、經文からみると「歴絡」「循屬」

ということばは他の経とは符合しません。これは三焦が上から下まできわめて長いからではないでしょうか。張介賓は「他の経には『歴』字がなく、ここだけにつかわれているのは上中下を指しているからで、上は膻中、中は中脘、下は臍下であり、ゆえに任脉の陰交穴は三焦の募穴となっているのである、という。善い説ではないでしょうか。これによれば先生の「上の両焦」説は誤りではないでしょうか。他に説があり解釈できませんか。

解答4

『鍼経』營氣に「氣從太陰出、注手陽明、上行注足陽明・・・還注小指次指之端、合手少陽・・・」とあるが、これは12経脈の周流の順序である。その手の少陽では「從膻中、散於三焦、注胆(訳注：今の『鍼経』は『注膻中、散於三焦、從三焦、注胆』に作る)」と流注しているが、下焦は膀胱の上にあるもので胆とかなり離れています。だから、手の少陽の三焦は「上の両焦」であって下焦とは無関係です。顕著な例では『鍼経』経別に「手少陽之正、入欠盆、下走三焦、散於胸中」「手之心主之正、入胸中、別属三焦、出循喉嚨、出耳後」とある。これが私の論拠である。

ちなみに募は膜字の誤りである。呂広の著す『募諭経』や『難経』にも五藏募の説があるが、これらは古義に違背している。

以下、合計13の問答がつづく。簡単に紹介できると思っていたが、稲葉先生の論意に正確に思っているため、はかどらない。次号につづく。

しかし、營衛も難しいものです。營衛と親子の関係にある三焦も『内経』時点では明解だったようですが、これが12蔵府のひとつとして仲間入りしたのがよくなかったのか、以後三重人格者じゃないかと前哲の穿鑿をうけたわけである。あの虚実補寫氏も謎の人とされるが、12経脈の仕事を手伝うようになって複雑になってしまった。『内経』時代の彼を知る人は、正當に評価されていない現在の彼をみてどう思うだろうか。

漢字でいえば、本義とか、初義とか、引伸義などの区別がある。三焦・虚実・陰陽などにも時間的に(他との関係で)意味するところが変化しているはずである。それを一義に拘泥して附会することは戒めるべきである。気づかなければならない、簡単に割り切れないということに。中国伝統医学はもともと割り切れない医学だろうとおもうが、それをいいことに「いいかげん」にしていまいだろうか。少なくとも、できるものから「明瞭」化する必要があるだろう。

まだまだ、五里霧の中だ。

(皆生)

三焦新解（その6）

稲葉通達著

『三焦營衛論』 三焦營衛対問（中）

問5

三焦の「焦」字はどんな意味でしょうか。

答

前哲の解釈には至当なるものはない。だから、三焦の論が紛々とし、それもかってに推測して経旨を誤らせている。

思うに、「焦」とは「盡きる」という意味であり、「醮」字と通用している。『爾雅』积水に「水醮曰晷」とあり、郭璞は「水の醮盡するを謂う」といい、邢昺は「醮は盡なり」といつている。水が尽きることを「晷」といい、いずれも涸渴することを意味している。『韻府』①は「海中洩水処曰沃焦」という。『莊子』秋水に「天下之水、莫大於海、万川歸之。不知何時止而不盈、尾閭洩之」とあり、尾閭について晉の司馬彪②は「尾閭、水之從海外出者也、一名沃焦・・・海水注者不焦盡。故曰沃焦」といつている③。以上のことから「焦」の意味がお判りと思う。

水穀が胃に入れば、上では營氣・衛氣・宗氣となり、下ではしぼりとして液汁を分別する。よって腸胃が尽きてしまいほとんど余分なものが無くなってしまふ。だから三焦というのである。焦字の意味が味得できれば、三焦の三焦たる所以の半分以上はわかったようなものだ。

巢元方は『諸病原候論』三焦病候(610成)で「三焦の氣は水穀を焦乾し清濁を分別する。ゆえに三焦といつている」といい、これは隋唐以前に伝授されていた古義にかなう説である。また「三焦の氣は焦熟をつかさどる」とも別義を挙げて、上述の説の正しさを強調させている。

問6

『難經』三十八難では心包絡と三焦を「有名無形」としているが、これはどうでしょう。

答

これは、前人の未解明の部分を明らかにしたものである。思うに、心包の

形状は心臓と全く同じもので、他の形状のものを見ることはできない。また、膈中も胸中のすき間(空処)というだけである。三焦もそのとおりで、上焦・中焦は胃府に位置し、下焦は膀胱の上で廻腸の近くにあつて、わづかに空間があるだけだ。だから『難経』が「無形」といったのだ。「有名無形」なることばは『難経』の妙語といえのではあるまいか。

問7

三焦の意味について諸説紛々で、各々が一説を立てている。しかし、先生の説はそれらの論と異にし、さらに諸家の誤りを排して、論を立てていますが、そのわけを詳細にご教示されたい。

答

私の説は『内経』を研究し、それを摘要して得たものであるから、贅言は要しまい。しかし、少しだけその要点を述べよう。

陳言は次のようにいう。三焦は手掌の大きさ位の「脂膜」で、膀胱とあい対している。三焦から二本の白脈が出て、脊を挟んで上行し脳を貫いている。

虞天民はいう。三焦は腹腔を意味し、腸胃を包みこむものである。胸中・背膜の上を上焦、背膜の下から臍までを中焦、臍から下を下焦といい、総称して三焦という。だから「うけいれることは(受納し)無い」のである。体には脂膜があり、腹腔の内側に在って蔵府を外側から包み込んでいる。

馬玄台はいう。上中下とは無形の三焦のことで、これは「一氣」である。手の少陽の三焦は府であり、有形であり、これは陳言の説通りである。

孫一奎はいう。陳言の説はでたらめで、信用できるとは限らない。三焦は無形であり、ゆえに膀胱と連ねて言うのである。膈中や気海は三焦が分布するところで、横隔膜の上に在って心と接近している。

張介賓はいう。「三」とは「三才」のことで、上と下を極めることである。

「焦」とは火の類いで、赤く、陽に属すものである。ひとの身体は、皮毛から蔵府まで、ある程度の大きさなら名称が無いものではなく、細かくとも見えないものはない。腹腔をぐるりと、大袋のような形状をしているものは一体何だろうか。それが、肉に付着している赤い層で、六合に象り、陽を司っている。これが三焦でなかったら、一体何だろうか。『針経』五癢津液別の

「三焦は気を出し、以て肌肉を温め皮膚に充つ」というのは、明らかに、肌肉の内側で蔵府の外側を三焦といつているのである・・・虞天民の説がこれ

に近いが、彼には「焦」字の意味が明らかになっていない。

以上、三焦論として詳しいものを挙げたが、皆『内経』を深く探求していないので、架空の、憶測の立論となっている。『難経』の「無形」ということばに拘ったり、「焦」字の意符の火に迷わされたり、君火相火を引いてきたり、『内経』の経文が各篇で齟齬していることを危ぶんだりしている。要するに、『内経』を自在に読みきれず、その本旨を把握していないのである。

問8

『素問』痿論に、肺は皮毛をつかさどり腎は骨髓をつかさどるといふ。

『針経』本藏に、肺は大腸に合し大腸はその応は皮である、腎は三焦膀胱に合し三焦膀胱はその応は腠理毫毛である。このふたつの論の違いは。

答

すでに、張介賓は『針経』五經津液別の「三焦出氣、以温肌肉、充皮毛」の文を証として、その点について検討している。

思うに、皮毛はもともと肺のつかさどるところであるが、皮の腠理や毛が生じている皮膚は衛氣がいぶして温めているところである。だから三焦に対応しているのである。

問9

『針経』本藏の「三焦膀胱」は下焦を指すものではない。しかし、衛氣が下焦から発生するならば、先生の衛氣が上焦から発生するという説と食い違ふのではないでしょうか。

答

三焦と膀胱を連ねて呼称し腎に対応させているのは、これが下焦であるからで、このことがどうして疑問となるのか。下焦はもとより上焦・中焦と同じ、これを三焦といっている。衛氣が下焦からは発生しないからといって、下焦と全く無関係ではないだろう。衛氣が上焦から発生する点については前述したので参照されたい。

問10

後代の、三焦と命門を表裏にする説については。

答

これも張介賓が論じている。命門とは目である。『針経』根結にみえる。心が動ずるところで目が達しないものはない。君たる心が命令を発する門が目である。つまり、心の使者である。『難経』の左を腎、右を命門とする説は『内経』の古義ではなく、道家が下丹田をさして命門というのにちなんである。だから、『難経』をもとにして立説しているのは信据できない。

【注】

- ①おそらく『佩文韻府』の略だろうが、引用文に相当するものが見当たらない。未詳。
- ②王先謙の『莊子集解』によれば、この司馬彪の説は『文選』巻53におさめられる嵇康(223-262)の『養生論』の李善(?-689)注に援引されるものである。
- ③引用文の意味は金関の「三焦」に詳しい。

■稲葉通達のQ&Aも一筋縄でいかない。どうも本論より分量が多いようだ。三焦それ自体が複雑な経過をたどっているのです、そのごちゃごちゃをどうしようか、と随分苦労して解説しているようだ。

■変なものに入手したなー。ちなみに「入手」にはふたつの意味があって、①手に入れること、②着手すること。ここでは②の意。

■森本哲郎の『日本語根ほり葉彫り』(新潮社)に、つぎのようにある。

何かを論ずる場合には、まず、言葉の定義が必要である。同じ言葉を、それぞれが勝手に解釈して議論しても、時間の空費でしかない・・・あまりに漠然とした言葉を投げ合い、それで、互いに話が通じているような錯覚に陥っている情景は、どう考えても喜劇的である。だが、日本人は、厳密な定義から出発することが苦手であり、また、そんなことを好まない。そこで、すべてのコミュニケーションが上滑りで終わり、一知半解のまま処理されてしまうのである。

所定の枚数に達しないので引用させていただいた。もしかしたら、ちょっと間延びした三焦の問題より、こちらの方がより響くのではないのでしょうか。

■だから、「漠然」の横綱「氣」という字は、不用意に使わないでいただきたい。また、第19回の経絡学会で「陽実」をつくづく考えたのは愚生だけではないでしょう。

三焦新解（その6）

稲葉通達著

『三焦營衛論』 三焦營衛対問（下）

■Q11

先生は、気は無形でめぐらないところはない、血は有形で道(パイプ)が無ければ流ることができない、といわれました。実際その通りであります。しかし、このことについて古人は言及していないはずですが、何か根拠がお有りでしょうか。

□A

これは気血の自然の姿である。そうでないはずがあろうか。もし、古論で明らかにするとすれば、すでに『内経』に記載されている。たとえば、「營気は脈中に在り、衛きは脈外に在る」、「營気は水穀のエキスで、五蔵を調え、六府に注ぐものであり、経脈の中に入る。衛気は経脈の中には入り込めない」、「漂う気で、経脈をめぐらないのは衛気である。経脈をめぐる精気は營気である」、「營気を、洩れ去ることがないように、ガードするものを経脈という」などと表現されている。このことから、血が経脈中に在るということは、水が川の中に在るようなものだといえる。だから、経脈が無ければ血は流れえず、川が無ければ水もめぐり得ないのである。気は、物体としては霧や煙のようなもので、ボワッとひろがり、至るところめぐるのである。「上焦は霧のようで、中焦は？のようだ」とはこのことである。『内経』にはすでに論及されているではないか。もっと勉強しなさい。

■Q12

『針経』衛気行では蹻脉については論じていないが、先生は陰蹻脉・陽蹻脉をもちいて立説しておられるが、この点いかがでしょうか。

□A

張介賓はこの点について述べているが、その基本的なところは『内経』にすでに書かれている。『針経』大惑論で「衛気が陰に入ることができなければ、陽に留まり、陽に留まれば陽気は満ちている。陽気が満ちていれば陽蹻脉が盛んとなる。陰に入ることができなければ陰気は虚すことになる。よって、目は

閉じない」、「衛気が陰に留まり、陽をめぐることができなければ、陰気が盛んとなる。陰気が盛んとなれば陰蹻脉が満ちる。陽に入ることができなければ陽気は虚すことになる。よって、目は閉じる」といっている。また、「衛気は日中は陽をめぐり、夜は陰をめぐる。よって、陽気がつきれば就寝し、陰気がつきれば覚睡する」ともいう。『針経』寒熱病では「陰蹻脉・陽蹻脉が交わり、陽が陰に入り、陰が陽に出、目の銳眥に交わる。陽気が盛んであれば目を開き、陰気が盛んであれば目を閉じる」という。これらのことから、衛気の正行が陰蹻脉・陽蹻脉であることがいえる。

■Q13

蹻脉は奇経八脈のひとつではないのですか。

□A

奇経八脈は『難経』の新説であって、古くからの論ではありません。

『針経』脈度では手足の三陰三陽の脈と蹻脉・督脉・任脉の長さを記録し、最後に「此気之大経隧」といっている。これによれば、蹻脉は経気が深く、帯脉や陽維脉・陰維脉とは類を別にするものであろう。『難経』が奇経のひとつに算入したのは誤りといえよう。また、脈度篇は「蹻脉の起点と終点は。何気の水をめぐらすのか。岐伯が答える。蹻脉は少陰の別で、然骨の後に起こり、内踝の上をのぼり、まっすぐ上って陰股をめぐり、陰(器)にはいる。のぼって胸裏をめぐり、欠盆に入る。さらに人迎の前にのぼり、頤(ほほ)に入り、目の内眥に注ぎ、太陽・陽蹻脉に合し、上行する。気が併合してめぐれば目を潤し、気がめぐらなければ目は閉じない」という。ここでは、陰蹻脉の起止をいっているが、陽蹻脉についてはふれていない。また、「陰陽の蹻脉があるが、どちらを算入するのか。岐伯が答える。男子は陽蹻脉、女子は陰蹻脉を経脈に数え、そうでないものを絡脉とする」という。つまり、男子は陽蹻脉が本経で、女子は陰蹻脉が本経である。算入することについては馬蒔注に詳しい。

ここでは陽蹻脉の起止についてはいわないが、『針経』衛気行では「目が開けば(衛気は)頭に上行し、項をめぐり、足太陽の背をめぐり、下って小指の先端に至る」という。これは陽蹻脉の起止の参考となる。

★これでQ&Aも終わり。結構分量がありました。で、何がわかったのか。今回は総集編にしましょう。(皆生)

三焦新解 (8)

稲葉通達の著した『三焦營衛論』を見終わりました。ここで、少しまとめてみましょう。「三焦」ということばを、次のように簡単に分類してみました。

a) 五蔵六府の「三焦」

ご存知のように、蔵と府は、心—小腸、肺—大腸、脾—胃、肝—胆は一対一で対応しています。しかし、腎だけは膀胱と三焦とに対応しています。つまり、府がひとつ余っていたところに、腎がふたつ引き受ける形式となりました。余っていたのは「三焦」であろうとおもわれます。

どのような働きをするか。『素問』靈蘭秘典論では「決瀆の官」といわれています。これを、稲葉通達は「決瀆」、つまり家屋から出る下水溝のような働きだといっています。つまり、膀胱が尿を貯めるに対し、三焦は水分の調節にあずかっています。詳細については、もう少し検討しなければならないようです。

b) 上焦・中焦・下焦の三焦

これが、稲葉通達の言いたかった三焦です。なぜなら、十二経脈学説と密接に関連し、特に『針経』医学の根幹となっているからです。十二経脈学説は、経脈篇に書かれている経脈の流注と病症だけの内容ではないことに注意。

① 上焦 胃の上口に在り、衛気を発生する。衛気は体表(腠理)に分布し、皮毛を潤沢にし、肌膚を温め、汗孔の開閉をつかさどっている。夜間は、主として、体内の蔵府をめぐる養っている。

② 中焦 胃中に在り、營気を発生する。營気は、四肢・百骸・五蔵六府を栄養する。いくつかの記載から、「血」ではないかとも考えられる。経脈は「血管」ではないか、という人もいる。私もそう思っている。ただし、条件付きで。

現今、言われる動脈とか静脈という脈管系とはなく、
ひびき現象を基に、臨床実践を踏まえ、高度の思惟を以て、
臨床に有益な血液循環系統を考えだした、
これが、中焦より発生した營気の通るパイプ、12の経脈である。

現在、行われている経脈(経絡)観というのは、この12の経脈に、衛気
の概念をつけくわえ、さらに経穴まで仲間に入れた、「無国籍」状態である。
甚だしいのは、これに補寫概念を盛り込んでいる。どう整理してよいのや
ら。だから、現在の見方で『内経』の医学を窺うことは、とてもむずかし
し、ましてや營気だとか衛気だとか言う、眉につばをつけられてしまう。
③ 下焦 a)の三焦は下焦と名前を変えて出ています。なにせ、主役を上焦
と中焦にとられてしまったので、ひっそりとしています。稲葉先生に「衛
気は下焦から発生」というの否定されてしまいましたから、もうスポ
ットをあびることはないかと落胆しています。

c) 部位の三焦

胸腔を上焦、腹腔では大腹が中焦と少腹が下焦であることを意味している。
もう少し拡大解釈して、横隔膜から上(頭)が上焦、横隔膜から臍までを中焦、
臍以下(足)を下焦というように、体を三分して、それに三焦を割り当てて呼
称している。

これは、すでに金関氏に指摘されるころだか、『脈経』で始めていわれだ
したらしい。『脈経』1-7の「両手六脈所主五藏六府陰陽逆順」に、「心、合於
上焦。肝、合於中焦。腎、合於下焦。肺、合於上焦。脾、合於中焦」とある。
王冰も『素問』金匱真言論の注で同説をいっています。とても便利な考え方
ですので、後世ひろく行われるようになっていきます。現在では、この三焦を基に
言う場合が主となっていて、b)の三焦を理解するには障害になります。

d) 十二経脈の三焦

a)でも説明しましたが、藏と府が対応しています。三焦は、腎の好意でとり
あえずの濼いで来ました。ところが、十二経脈説では、心包を用意してくれま
した。これで三焦もひがむことがなくなりました。

ところが問題。十二経脈の三焦とはいったい何物か。

- ① a)の三焦か
- ② b)の三焦か
- ③ b)の三焦の内の上焦と中焦か
- ④ c)の三焦か

いよいよクライマックス。深まる三焦の謎。三焦の実体は如何に。(皆生)

三焦新解 (9)

今回は、稲葉通達の著した『三焦宮衛論』から三焦を分類しました。基本的には次の四つ。

- ① 六府のひとつ
- ② 上焦・中焦・下焦
- ③ 部位の三焦
- ④ 経脈が絡属している三焦

この分類の特徴は『難経』の説を取り入れていないことにある。『内经』だけを整理すれば三焦というものはどのようなものか理解し易いが、『難経』の説を含めて考えるとわかりにくくなるのである。最近の研究者は、『内经』と『難経』の差を考慮に入れずに、どちらも同じ古典として一緒に論じているので、その論意がわかりにくい。とくに中国の研究は五蔵と関連させたり、中医学の目でみたりしているので、『内经』の三焦、つまりもともとはどのような意味を持っていたのかを問題にするのではなく、現在の理論からみて都合のいい三焦を考えているような気がする。でも、その人の視点や背景などによって三焦像が創られているようなので、誰の三焦論が正しい、間違っているとはいえないと思う。愚生としては稲葉先生の三焦論がわかりやすい。

さて、④の手の少陽三焦経について考えてみよう。経文にはつぎのようである。

起于胸中、出属心包络、下膈、歴络三焦。(手厥陰)

入欠盆、布膻中、散落心包、下膈、循属三焦。(手少陽)

手の厥陰経も手の少陽経も、どちらも膈を下って三焦を絡属している。ということは、確かに上焦・中焦・下焦をめぐるということがわかる。もしかしたら、六府のひとつの三焦、つまり下焦だけをめぐっていることも考えられるが、「歴」「循」の字から、順番に絡属することが知れるので、複数であることがわかる。

手の少陽はどの三焦をめぐるかについては、三焦新解(5)の稲葉先生の解

答3に、「この三焦は上の両焦を指している」といい、解答4では補足説明をしている。経文の記述が簡単なので果たして稲葉先生の解釈が正しいのか判らない。

病症の角度からみてみよう。『針経』本輸(2)には、

下焦実則閉癰、虚則遺溺。

と下焦の病症が書かれていたり、同じく邪気蔵府病形(4)には、

三焦病者、腹気満、小腹尤堅、不得小便窘急、溢則水留為脹。

ともある。

上焦が衛気を発生するならば、上焦の不調では衛気が少なくなって渋滞することも考えられる。『素問』風論(42)には、

衛気有所凝而不行、故其肉有不仁也。

とあり、いわゆる麻痺様の症状があらわれるのである。

これらの三焦に関係する病症が、是動病ないしは所生病には少しも記されていないのである。とすれば、経脈篇の記述では手の少陽が、上焦・中焦・下焦をめぐるのか、上焦・中焦をめぐるのか断定はできないのである。

よってこの問題は当分の間保留しましょう。

③の部位をあらわす三焦については、前回は『脈経』と王冰について紹介したが、今回は『難経』の三十一難の初唐の人といわれる楊玄操の注を補足しておこう。

自膈以上、名曰上焦。

自齋以上、名曰中焦。

自齋以下、名曰下焦。

ここから、体を三つに分けて呼ぶ三焦は楊玄操が言いだした、という人もいる。

四月に、北里研究所医史文献研究室室長の小曾戸洋先生から、カネボウ薬品の『THA KAMPO 56』(第10巻、第2号、1992)に連載された、上海医科大学教授の張鏡人氏の「三焦初探」という論文をご恵贈賜りました。

また、上海中医学院教授の凌耀星先生も、昭和62年に後藤学園で「三焦の二つの系統」と題して発表しました。幸いにも邦訳を高橋葉子女史から提供賜りました。

追って紹介したいと思います。

(皆生)